

# 聖徳太子と西方寺の十一面観音像

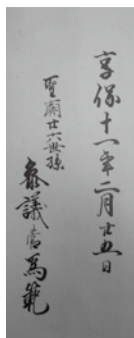
西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



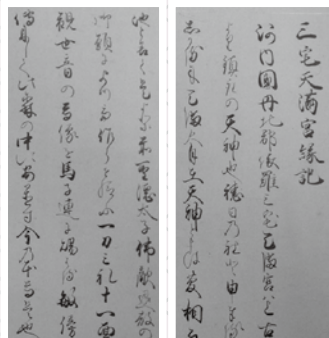
▲本年8月10日に行われた千日会 中央に十一面観音像が祀られる。



▲十一面観音像の版木の刷り物(右)と参拝集印(左)(西方寺蔵)



▲「三宅天満宮縁起」右:冒頭 中:伝・聖徳太子作の十一面観音像の記述部分 左:巻末(三宅中4丁目・屯倉神社蔵)



▲西方寺十一面観音像(松原市教育委員会提供)

わが国最古の歴史書「日本書紀」によると、聖徳太子は推古天皇の二十九年(六二二)一月、四十九歳で亡くなりました。本年は、数えて一四〇〇年目を迎えます。聖徳太子の墓がある叡福寺(南河内郡太子町)など太子ゆかりの寺院では、太子の偉業を偲ぶ法会が執り行われています。とくに、一〇〇年に一度の節目にあわせて行われる法会は御遠忌とよばれ、盛大に催されるのです。聖徳太子は、日本初の二万四札の表紙として登場したように、撰政という政りごとだけでなく、日本仏教の祖という超有名な人物として、今なお慕われ続けています。

本市においても、聖徳太子に関わる寺や文化財があるかという問い合わせが、何件かありました。三宅中五丁目の古い町並みが残る西側に融通念佛宗の西方寺が建っています。もともと浄土宗でしたが、鎌倉時代末期の元亨年間(一一三二〜二四)に、融通念佛の教えを広める念佛勧進道場が建てられたことが始まりと伝えられています。

本堂の横に、観音堂があります。ここに祀られる本尊が十二世紀後半の平安時代後期の十一面観音像で、市の指定文化財です。針葉樹の一本造で、高さ93cm余を測ります。ふっくらとした丸顔で、穏やかな表情を示しています(「松原歴史ウォーク」257)。

本像は、三宅中四丁目に鎮座する屯倉神社境内にあった梅松院の本尊でした。この十二面観音像が、聖徳太子によって彫られたと伝わっているのです。梅松院は真言宗で、神社の神宮寺にあたり、山号を「菅應山」と称します。屯倉神社は、江戸時代には三宅天満宮とよばれていました。天明三年(二七八三)に描かれた「天満宮境内絵図」には、鳥居と門の北側、現在の社務所あたりに東から「観音堂」「宮寺梅松院」「鐘撞堂」が並んで見られます。

江戸時代から、梅松院の伝・聖徳太子作の十一面観音像は人々からご利益のある仏さまとして信仰されていました。江戸時代中頃の享保十一年(一七二六)二月二十五日に書かれた「河内丹北郡三宅天満宮梅松院縁起」に、本像の由来が記されています。そこには、「聖徳太子が佛敵退散の御願によって作らせ給ふ、一刀三札の十一面観世音の尊像を馬子連に賜わる。敵傍が伝来して此森の中に安置す。今の本尊是なり」とあります。

伝承では、太子が佛敵を退散させるため、仏像を刻むのに、一刀を入れることに三度礼拝して造った十二面観音であること。その像を推古天皇のもと、太子とともに政務を執っていた蘇我馬子に賜えたとあります。のち、本像は子の蘇我敏傍に伝わり、屯倉神社が鎮座する森、梅松院に安置したのだと述べています。

江戸時代、神仏習合の習わしで梅松院の僧が、読経とともに神社の祭礼などをつかさどっていました。神社祭神の菅原道真(天満大自在天)の本地仏(神の正体)として本像が祀られ、そのご利益である安全祈願の「方違之御札」も刷って参拝者に渡していました。

梅松院は明治四年(一八七二)、廃寺となりましたが、十一面観音像は近くの西方寺に移され、引き続き三宅観音とよばれ、信仰が続けられていたのです。江戸時代以降、多くの人がご利益を得られるよう版木による刷り物も広く流布していききました。右手に錫杖を持つお姿で、「聖徳太子御作 十一面観世音 天満宮御本地」と上面に刻まれており、西方寺に蔵されています。同じく、「方違之御札」として、「奉拝 聖徳太子御作 方違 十一面観世音菩薩 天満宮御本地」と彫られた参拝集印も残されています。

江戸時代後半には行われていた河内地方の古刹を巡る河内西国三十三箇所霊場の十五や十三番、のち客番に西方寺が選ばれますが、この十一面観音を祀っていたからです。

西方寺では、毎年八月十日に限って、本像を同日にお参りすれば、千日分の功德をいたたき、観音様との御縁をより一層深められる日とする「千日会」を続けています。今年もコロナ禍でしたが、檀信徒さんらは感染に気をつけながら、参拝されました。聖徳太子信仰が三宅の地で、脈々と受け継がれているのです。

梅松院は明治四年(一八七二)、廃寺となりましたが、十一面観音像は近くの西方寺に移され、引き続き三宅観音とよばれ、信仰が続けられていたのです。江戸時代以降、多くの人がご利益を得られるよう版木による刷り物も広く流布していききました。右手に錫杖を持つお姿で、「聖徳太子御作 十一面観世音 天満宮御本地」と上面に刻まれており、西方寺に蔵されています。同じく、「方違之御札」として、「奉拝 聖徳太子御作 方違 十一面観世音菩薩 天満宮御本地」と彫られた参拝集印も残されています。

梅松院は明治四年(一八七二)、廃寺となりましたが、十一面観音像は近くの西方寺に移され、引き続き三宅観音とよばれ、信仰が続けられていたのです。江戸時代以降、多くの人がご利益を得られるよう版木による刷り物も広く流布していききました。右手に錫杖を持つお姿で、「聖徳太子御作 十一面観世音 天満宮御本地」と上面に刻まれており、西方寺に蔵されています。同じく、「方違之御札」として、「奉拝 聖徳太子御作 方違 十一面観世音菩薩 天満宮御本地」と彫られた参拝集印も残されています。